

2016年度博士学位論文審査報告

博士学位論文申請者 工藤英美

愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士後期課程（2011年度入学）

博士学位申請論文題目 幼児期における多義図形認知の発達
—表象発達からのアプローチ—

博士の専攻分野の名称 博士（人間発達学）

審査担当者	主査	教授	丸山真司
	副査	教授	別府哲（岐阜大学）
	副査	名誉教授	加藤義信
	副査	教授	望月彰
	副査	教授	堀尾良弘

本論文の目的は、3～6歳の間になり始める多義図形認知について表象発達の視点からアプローチし、その発達過程を解明することであった。多義図形とは1枚の図に対して2通りの見方が可能な図形であり、本論文では幼児がいつから、どのように多義図形に対して2つの見方が可能になっていくのかを解明するために、全5章で論文を構成し、3つの実験（第2章～第4章）によって結論を導き出している。

第1章ではこれまでの知覚心理学における多義図形認知に関わる先行研究を整理する中で、とりわけ子どもの多義図形認知に関する研究において多義図形の認知とメタ表象能力の発達との具体的な関連やその発達プロセスを明らかにすることが発達心理学研究における今日的課題であることを引き出している。第2章（研究1）では、幼児期（年少・年中・年長群）における多義図形認知の年齢的变化とその規定要因が検討され、その結果、自発的反転が可能になり始め、図形の再構成による主観的経験の意識化の促進効果がみられるのが年長群であること、さらに図形の再構成による主観的経験の意識化が自発的反転の規定要因になり得るといふ仮説を引き出している。その仮説を実証するために第3章（研究2）では、多義図形の再体制化と「図形の連続的变化」による認知の促進効果を検討している。実験の結果、主観的経験の意識化が多義図形認知には必要であることやその発達プロセスが実証できず、その原因が図形の連続提示手続きにあったことを突き止めた。それを受けて、第4章（研究3）では研究2での連続提示手続きを改良した上で、多義図形の理解に主観的経験の意識化が必要である可能性を検討した。実験の結果、多義図形の反転を困難にしている要因の一つが主観的経験の意識化という表象問題であることを明らかにした。これらの3つの研究を論理的に積み上げることで、本論文の結論として、多義図形認知の発達における困難さが自己の心的経験を意識化するために必要なメタ表象能力の発達の未熟さにあること、多義図形認知の発達過程においては図形の見えが現実であると理解している段階から、主観的な心的表象であると意識化でき現実と自己の心的表象との関係につ

いて整合性のある説明ができる段階へと発達していくことで自発的反転が可能になることが明らかにされた。

審査委員会の審議において、工藤英美氏の博士論文研究の意義とオリジナリティおよび課題は以下の6点に要約される。

1) 本論文の「幼児における多義図形認知の発達」というテーマは、「幼児には一つの多義図形が二通りに見えるか否か」という、一見極めてピンポイントの狭い現象のみに焦点を当てているように見える。それゆえ、本研究は子どもの骨太な発達の流れの把握やその知見に立脚した保育・教育実践とは大きな距離があると受け取られてしまうかもしれない。確かに、多義図形認知は大人の場合、知覚レベルの局所的なメカニズムを解明するための研究テーマであった。しかし、子どもの場合には、その発達の研究は認知発達上のもっと大きな領域普遍的变化、すなわち、メタ表象機能の出現に至る変化を捉える研究につながると、工藤氏は考えた。4歳から5歳頃に見られるメタ表象機能の新たな出現は、これまで心の理論課題（誤信念課題）を通して研究されてきたが、昨今、このパラダイムでの研究が行き詰まる中で、メタ表象の発達を最もよく捉えることのできる研究課題として、多義図形課題に着目したところに、まず何より、工藤氏の論文のオリジナリティを見ることができる。

2) メタ表象の発達研究の一環としての多義図形認知研究は世界的にも緒についたばかりであり、わが国ではこれまで皆無であったと言ってよい。その意味で工藤氏の研究は、先駆的な意義を有する。またそればかりでなく、このような視点を踏まえた氏の研究は、幼児期の子どもの日常生活に見られるメタ表象能力の形成に関連する様々な心理的側面（他者の視点の理解、嘘や秘密、冗談などの多重的な心の世界の形成）のより深い理解に役立っていく可能性も十分有しており、人間発達学研究所の学位論文にふさわしい内容を備えていると言える。

3) 多義図形認知とメタ表象能力（主観的能力の意識化）との関係に着目し、さらにそこから幼児の多義図形認知の発達過程を解明しようとした本研究は、多義図形認知研究において挑戦的な研究として位置づけることができる。とりわけ研究3における多義図形の自発的反転に主観的経験の意識化が必要か否かを動画によって図形の多義性を教える手続きを行い、主観的経験の意識化が必要な条件とそうでない条件とを比較検討する実験は斬新で独創的な実験として評価できる。この実験手続き及び結果は多義図形認知の研究、あるいは幼児や自閉症の認知研究に新たな知見を提供する可能性を秘めていると思われる高く評価できる。

4) 論文の2章の内容を構成する実験的研究は、『発達心理学研究』第28巻2号(2017)に掲載される。『発達心理学研究』は日本発達心理学会の学会誌であり、採択率20%前後のわが国でもっとも権威のある発達研究の学術誌である。このことからわかるように、論文に取り上げられている実験的研究の質は十分、博士学位論文としての水準に達していると評価できる。

5) 第4章で取り上げられている実験的研究の公刊は未だ学会発表のみで、学会誌への投稿はこれからであるが、すでに学会レベルではその独創性に高い評価が寄せられている。この実験は、多義図形認知の前提には「現実そのもの（図柄）とその主観的経験（見え方）とを別のものとして意識化」していく心的能力の獲得が必要であるとの斬新な仮説のもとに、これを検証するための独創的な課題を考案することによって行われた。パソコン上で

作動するモーフィング機能を応用したプログラムの開発によって実現した課題は、これ自体が全くオリジナルな課題であり、すでに学会レベルで高い注目を集めている。

6) 今後の課題として、「主観的経験の意識化」や「メタ表象能力」を含む本研究における重要概念についてさらに理論的に再整理をして構造化し、研究の手続きや方法を開発していくことで、自閉症児の認知研究や幼児の発達心理研究へと発展させていくことが期待されると指摘された。

以上から、本審査委員会における審査の結果、本論文が愛知県立大学博士（人間発達学）の学位授与に相応しい水準にあると全員一致で判断し、合格とする。